

『未来を支える食料生産』 補助資料

（その 1）－震災からの復興に向けた取り組み－

教育出版編集部

■この資料をお読みになる先生方へ

この資料の発行にあたり、まずはじめに、東日本大震災により被災された方々に謹んでお見舞いを申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興を、心よりお祈り申し上げます。

平成 23～26 年度発行の弊社小学校社会科教科書では、岩手県宮古市と宮城県気仙沼市の養殖・栽培漁業を教材として、より質の高い海産物を消費者に届けたいという願いのもと生産者の方々が取り組んでいる様々な工夫や努力を紹介しておりました。

しかし、2011（平成 23）年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、これらの地域に大きな被害をもたらしました。編集部では、宮古市や気仙沼市の生産者の方々の安否、漁業の現況、復興に向けた取り組みなど、教科書の内容を補足する情報を先生向けに提供するために、同年 8 月に各地を訪問して取材を行いました。そして、岩手県宮古市の重茂でわかめやこんぶを養殖している佐々木正男さん、同じく宮古市の津軽石にあるさけのふ化場で働いている萬直紀さん、宮城県気仙沼市でかきを養殖している畠山重篤さんから、お話をうかがいました。この資料は、それらの現地取材をもとに作成したものです。

子どもの関心や問題意識のあり方にそくして、この資料の中から適宜内容を選んだり要約したりして読み聞かせるなど、教科書を補足した指導に活用していただければ幸いです。

■もくじ

わかめ・こんぶの養殖漁業 佐々木正男 さん ……	3
さけの栽培漁業 萬 直紀 さん ……	8
かきの養殖漁業 畠山重篤 さん ……	13

※畠山重篤さんは 2025 年に逝去されました。畠山さんのおもいは、多くの人に引きつがれています。

※次ページ以降の内容は、取材を行った 2011 年 8 月当時のものです。

※この資料に掲載されている写真は、併せて弊社ホームページにアップしておりますので、適宜ご活用ください。

三陸の自然とこれからも生きる ～震災から復興への日々～

わかめ・こんぶの養殖漁業 ^{さ さ き まさ お}佐々木 正男さん（岩手県宮古市）



■津波は堤防を越えて

最初に大きく地面が揺れたとき、佐々木さんは高台にある自宅にいた。しばらくその場でじっとしていたが、揺れがおさまるとすぐに家を飛び出た。港の様子を見に行くためだ。

「私は元消防団員で、現在も防災クラブの活動を行っている。災害が発生した際には、避難する人を誘導したり、安否の確認を行ったりしなければならなかった」という佐々木さんの自宅から港までは、車に乗れば目と鼻の先だ。

港の近くに住んでいる以上、津波のことは常に頭にある。佐々木さんの住んでいる岩手県宮古市の^{おもて}重茂には、いくつかの集落があり、そのうちの 하나가港からほど近い場所にあった。その集落に被害が及ばないかを心配したが、10年ほど前に新しい堤防が完成してからそれまでに、津波が到達することはなかった。

遠い昔、その集落まで津波が到来したことはあり、その後しばらくの間は海の近くに人が住むことはなかった。だが、それから時間がたつとともに再び家が建ち始めて、やがて集落になっていった。さらに、新しい堤防ができたことも手伝って、安心していた人は多かったといえる。

しかし、今回の地震では津波警報が発令されており、地震の大きさからいっても安心はできない。「地震から津波到着までは25分くらいの間があったように思う。3メートルくらいの津波かと思っていたが、実際はそれどころではなかった」。

佐々木さんが初めて確認することのできた津波の高さは4～5メートルで、この津波によって大小合わせて300艘以上の船が流れていった。

「その後に起こった波が一番大きくて、堤防を越えて陸地に入って来た。まるで映画を観ているみたいだったよ」。

地域の消防団によって水門が閉められたあと、佐々木さんたちは山を登って、高台から状況を見ていた。すると、「沖に白い波が見えて、それがだんだん大きくなって港にやって来た」。

あまりの大きさに呆然とした佐々木さんは、ただ津波を見ることしかできなかったという。状況のをみ込んでからは、すぐに安否確認が始まったが、地区の住民全員の安否が確認できたのは翌日の夕方だった。

消防団や防災クラブの活動によって、ほとんどの住民が避難できたが、中には家の中で寝ていた人もいて、数名は助からなかった。港のそばにあった20戸ほどの家はすべて流され、車も津波にのまれた。

■300 艘以上の船が…

港近くの集落の被害は大きかったが、港そのものはどういう状況だったのだろうか。

佐々木さんのいる重茂の音部地区には、港にいくつかの設備がある。こんぶとわかめの養殖施設に、こんぶの集荷場（乾かしたこんぶを保存するところとしても使われていた）、わかめの加工場（わかめをゆでて塩づけにし、冷蔵庫に入れる）、そして船が 300 艘以上だ。

これらは、津波によってすべて壊れたり流されたりして、使えない状況になったという。港を訪れてみると、こんぶの集荷場は鉄筋の骨組みだけが残されていて、わかめの加工場は完全になくなっていた。



▲津波の被害を受けた、音部漁港の集荷場

■生きることに精いっぱいだった

「震災から 1 週間は、“もう漁業が続けられないのではないか”と思って茫然としていた。“ここで生きていけるのか？”とも考えたよ。家にいたら、いろんなことを考えてしまってどうにかなりそうだったから外に出た。地域の人みんなで食料を持ち寄るなど、協力して過ごした」と、佐々木さんは当時の苦しさを思い出しながら語ってくれた。

震災から 1 週間が経過したあたりで、道路の復旧作業が始まり、ようやく物資が届き始めるようになったが、苦しい状況は続いた。

「地震が起きてから 1 か月は、厳しい日々が続いたね。米もなくなって、出かけて行って物資を探し歩いたけど、品不足でなかなか見つからなかった。そのときは生きることに精いっぱい、仕事のことは頭が回らなかった」。

そういった状況のなかで、佐々木さんは薪ストーブを手に入れることができた。木はたくさんあったため、灯油などの燃料を必要としない暖房器具はありがたかった。もちろん電力は復旧しておらず、夜は家の中でも真っ暗になるのが当たり前という生活が続いた。

■収穫が始まった矢先の津波

わかめとこんぶの養殖漁業は、震災や津波によってどうなったのか。

「わかめは、通常だと 2 月下旬から収穫と出荷が始まる。今年は春のしけで 3～4 割が被害を受けていて、そのせいで出足が遅れていたね。地震の直前に、様子を見るために 1～2 日くらい獲ってみて、“これなら大丈夫だ”と考えていた時期だったんだ。こんぶの収穫は、まだ始まってもしなかったよ」。

例年 5 月の連休あたりから生こんぶの出荷が開始され、7 月頃から干しこんぶの出荷が始まることを考えれば、わかめもこんぶも、ほとんど収穫をしていない状態のときに津波に襲われたことになる。

■復興は地域一体となって

そのような、まだ先行きの見えない4月初旬、重茂地区の漁業協同組合が今後の方針を発表した。

「“組合がめんどうを見るから、復興に向けて動いていこう”ということを言われた」。

重茂地区では、漁協を中心として組織的に漁業が行われている点に特色がある。震災後の復興の取り組みも、地域で一体となって進めることができた。また、重茂地区の漁協では、組合員全員が保険に加入する仕組みをとっていたため、一定の保障を得ることができている。

「復興のために動くことにはなったが、まず何から手をつけるかということ考えた。とりあえず、船はどうにかしないといけなかったから、そこから始めることにした」。

復興すると決めてからの、漁師たちの動きは速かった。

船については、津波で流されたものの確認をしながら回収することになった。

「養殖のロープや網に引っ掛かった使えそうな船を海から引き上げていくことにした。余震もあって様子を見ながらの作業だったが、7～10日かかって10艘ほどを引き上げることができた。そのうち、3艘ほどが使えそうだったけれど、ほとんどが修理をしないといけない状態だった」。

ほかに、全国各地から安く購入できそうな船を、漁協が中心となって探しまわった。佐々木さん自身も新潟の佐渡まで行くなどして、最終的には音部地区で40艘近くの船が集まった。しかし、新たに集めた船も、あちこち損傷していたので、船の修理ができる業者を見つけて作業をお願いした。

「依頼をしたまではよかったけれど、こっちに来てもらうことができなくて、我々が造船所まで船を運ばなくてはならなかった」。

佐々木さんたちは組合から10トン車を借り受け、それを使って造船所まで持っていくことにしたが、問題がまた一つ発生した。

「造船所もがれきだらけだったんだ。だから、自分たちでがれきを片付けて、船を修理できる環境を整えた。そうすることで、優先的に作業をしてもらった。それに、電力がないから発電機も必要だった。これも自分たちで持って行ったよ。船がないことには、漁師は何もできないからね」。



▲漁港には、まだ数は少ないものの船が並んでいた

■人がいないところに復興はない

「そうやっていろいろ動いてみて、“ここで漁師をやっている。ここで生きていける”と思ったのは最近になってからだよ。作業が進んで仕事に取り組むなかで、希望が見えてきた」。

佐々木さんはそう言いながらも、復興への過程で、「多くの漁師が抱えている問題」に直面したことを明かしてくれた。それは、後継者問題だ。過疎化が進む地域などでは、息子が都市部に働き

に出たために後継ぎがいなくなったり、当人が結婚していないために後継者候補自体が存在しなかったりということがあった。

もともと、重茂地区では後継ぎが7割ほどおり、全国的に見ても、この割合はかなり多いほうだといえる。しかし、今回の震災によって、漁業で今までのような収入を得ることができなくなってしまったら、若い人たちがこのまま重茂地区に住み続け、後を継ぐことも少なくなってしまうのでは、という危機感を抱いたのだ。

「若い人がいなくなるのが一番怖いよ。人がいないところに復興はないから」

佐々木さんは、震災後に息子さんと後を継ぐかどうかについて話をしたのだろうか。

「“重茂地区はどうなるか分からないから、外へ働きに行ったらいい”と伝えたよ。それを聞いた息子は何も言わなかったけど、きっと悩んでいたんだろうね。そのときは、今より見通しの立たない状況だったから、息子の将来のことを考えると、黙って外に出すほうがいいと思ったんだ。収入がないところにいつまでもいるわけにはいかないし、動き出すのが遅ければ遅いほど状況は悪くなると考えていた」。

同じような悩みを持ち、苦しんで、後継ぎと話をした人、しなかった人、できなかった人もいただろう。そういった苦しい状況でやるべきことは、「できることをやること」だと佐々木さんは言う。

■子の代、孫の代にも漁師ができる環境を

佐々木さんたちが携わる養殖漁業の当面の課題は、壊れた養殖施設を撤去することだ。

わかめとこんぶの養殖施設は、海中に張られた網やロープである。その網やロープにわかめやこんぶの苗を巻きつけて育てている。佐々木さんたちはそれらを海中から引き上げようとしたが、わかめやこんぶが絡まり合っているために重くてできなかった。そこで、クレーン付きの台船を使い、網やロープを切りながら少しずつ引き上げてもらうことにした。その作業には時間がかかったが、7月



▲漁港では、クレーンが動いて復旧作業を進めていた

ようやく終わったそうだ。

「これから新しい施設をつくっていくよ。施設をつくりながら、わかめやこんぶの種（種を発芽させて苗にする）を準備しなくてはいけない。わかめの種は自分たちでつくって、お盆の前にはそれをつけたいから、急いで施設をつくっているところ。こんぶの種は北海道のほうに協力をお願いしている。収穫の時期は遅れるけれど、例年の6割はつくるつもりで進めているよ」。

佐々木さんたちはそのほかにも、できることから始めようと動き出している。

「少し前に、養殖はまだできないから、まずは天然わかめを獲ろうということで船を出した。音

部地区の漁師全員の参加で、計 60 トンほど獲ることができて、みんなで分け合った。天然のわかめは、思っていたより残っていたよ」。

このほかに、依然として船不足が問題になっている。

「今はみんな共同で船を使っているけれど、いつまでもそうするわけにはいかないから、以前のように自分の船を持てるようにしなくてはいけないね。だから早く船を元の数に戻せるようにしないと。この港の養殖施設は、3 年で元の状態に復活させようと思っている。そのためにはへこんでいられないし、子の代だけではなく、孫の代になっても漁師ができるような環境にしておきたい。それが自分たちの責任だと考えている。少しでも早く復興して、収穫したものを多くの人に食べてもらいたい。漁業は、買ってくれる人、食べてくれる人がいて成り立つものだから、全体が復興に向けて動いてほしい」。

■佐々木さんからのメッセージ

「みんなが支援してくれているから、復興に向けて力を出せる。今回の震災で学んだことは、考えてばかりいないで、自分でできることはまずやってみるということ。それでもできないことは、ほかの人に助けてもらえばいいということ」。

「今手元にあるもので、どうやってこの状況を切り抜けるかを考えることが大事。いろんなものが足りないなかで、どうやって実現させていくかを考え続けていくよ」。

最後に、復興に向けて苦労は続くが、震災以後、最もうれしかったことを語ってくれた。

「天然わかめを獲るときに久しぶりに船を出して、漁をした。すると、自分をはじめとして、みんなの顔が生き生きとしていたよ。我々は海に出るのが好きで、海に出ることが一番の元気になる。これは、ただ食べるためにやる仕事とは違うんだと気づいたよ」。

海で働く漁師たちは、後継ぎの人たちも含めて本当に海が好きだということが伝わってくる言葉だった。

さけの栽培漁業 よろず なお き 萬 直紀さん（岩手県宮古市）

■一刻も早く、ふ化場へ

地震が起きた3月11日14時46分、萬さんはふ化場のある宮古市津軽石にはおらず、盛岡市で開かれた県漁連の会議に参加していた。会議室は建物の5階だったが、立ってられないほどの揺れだった。その瞬間、頭に浮かんだのはさけのことだった。当時、飼育池には多くの稚魚がいたからだ。

飼育池では、井戸水を電動のポンプでくみ上げて、かけ流し（くみ上げた水を循環させることなしに流すこと）で稚魚を飼育している。停電になれば、自動で発電機が回る仕組みになっているものの、その燃料は8時間しかもたない。電力が復旧しない場合、8時間以内に稚魚をすべて放流しなければ、井戸水をくみ上げられなくなって死んでしまう。

そうはいつでも、「津波がふ化場まで来るとは思っていなかった」。今までの停電はせいぜい1時間、どんなに長くても一晩たてば復旧していた。しかし、状況がわからない以上、とにかく現場に向かわなくてははいけない。

ふ化場に車を走らせる間、ラジオを聴いていたが、電波が悪いために途切れてしまって状況がつかめない。17時過ぎには近くの土手までたどり着いたが、あたりを見て驚いた。状況は、萬さんが思っていたより何倍もひどかった。



■仲間の安否を確かめる

「あたり一面水浸しで、真っ黒だった。その黒い海に家や船が浮いていた」と萬さんは語る。高さのない施設や建物は水にのみ込まれていて、「二階建ての事務所が島のように見えた」。津波は津軽石川の河口にある水門を越え、港にあった船や建っていた家を押し流していた。

そんな現場を見て最初に思ったのは、「ふ化場で働く仲間は、全員避難できたのか」ということだった。携帯電話も通じず、安否確認ができない。当日は、避難所にもたどり着けないような有り様だった。

萬さんの心配は尽きなかったが、幸いにも、働いていた4人はみな助かっていて、3～4日たってから会うことができた。後でわかったことだが、津波で家が流れているのを見て危険を感じた4人のスタッフたちは、裏山を駆け上がって逃げたという。本人たちは無事だったものの、彼らの車は津波にのみ込まれ、使い物にならなくなった。

■さけの栽培 1年のスケジュール

さけの栽培漁業は、9月上旬のさけの捕獲から始まる。4年前に放流し、帰ってきたさけを捕まえる作業だ。捕獲したさけは蓄養池に運ばれ、そこでしばらく泳がせて成熟するのを待つ。さけのお腹を手で触るなどして、成熟したことを確認できたら、メスのお腹から卵を取り出し（採卵）、

その卵にオスの精子をかける（授精）。さけの採卵は、1月いっぱいまで続けられる。

受精卵はふ化室に運ばれて、その部屋でふ化する直前まで育てられる。水温が8度ほどであれば、受精してから1か月ほどすると、卵に眼ができてくる。これを発眼^{はつがん}といって、ここからさらに1か月ほどでふ化する。

ふ化直前になるとまた別の池（これは養魚池と呼ばれるが、この池の代わりに浮上^{ふじょう}槽というボックスを使うこともある。萬さんが働いている津軽石ふ化場は、この浮上槽を使っている）に移され、そこでふ化するのを待つ。

ふ化したばかりの魚は、お腹に袋を抱えていて、2か月ほどたつとその袋がなくなって魚の形になる（この袋には栄養分が詰まっていて、しばらくはそこに含まれる栄養だけで育つ）。これを浮上^{ふじょう}といって、12月中旬くらいから始まる。そこからしばらく育てられ、3月から放流が開始される。「さけは成魚も稚魚も含めると、かなり長い期間飼育されているんだよ」と萬さんは教えてくれた。

放流を終えたあとの6月は、池が空になるので掃除をして、7月からは池の準備に入る。9月に帰ってくるさけを受け入れるためだ。

■稚魚のゆくえは…

地震が起きたあと、さけの稚魚はどうなったのだろうか。

「現場に入ると、そのへんにできた水たまりに、大小含めて稚魚がいっぱいいた。だから、津波で押し流されて自然に放流したような形になるね」。

飼育していた池の上には、津波に流されてきた家の屋根が乗っているなど、被害は大きく、そこに稚魚が残っていることは考えられない状況だったようだ。



▲津軽石ふ化場。赤い屋根の2階建ての建物が事務所になっている

だが、再会したスタッフたちに萬さんが話を聞くと、地震が起きたときにできるかぎり放流したのだという。萬さんは常日頃、「緊急時には、稚魚を放流するように」とスタッフたちに伝えていた。彼らはそれを守り、地震の直後、池の水が濁ってきたのがわかるとすぐに稚魚を川に放った。水が濁るのは稚魚にとってよいことではないからだ。設置してある網を上げれば、そのまま放流できるつくりにもなっていた。

本来は、もっと大きく育ててから放流する予定だった。通常なら、3月1日から放流が始まり、そこから5月までかけてすべての稚魚を放っていく。卵を採るタイミングの違いによって、大きくなるまでの期間に差が出るためだ。

実際に、地震当日にも朝から放流していて、すでに大きくなっている稚魚もいたが、まだまだ小さい稚魚も多かった。

「放流しないことには帰ってこないからね。不安はあるけれど、今年放流したさけが帰ってくるイメージはあるよ」と萬さんは言う。「それに、4年前に放流したさけはこれから帰ってくるから、その準備をしないとイケない」。

■がれきの中に見た、一筋の希望

「今は復興に向けて動いているけれど、最初に現場を見たときは無理だと思ったよ」と、当時の心境を思い返ししながら、萬さんは話をしてくれた。

地震当日、ふ化場近くの土手に萬さんがたどり着いたあとも、津波は何度かやって来た。最初のように大きなものではなく、水がじわじわ来るくらいのもものだったが、そのたびに土手を上がり、引いたら下りての繰り返しで、思うように現場の状況を確認することはできなかった。

「翌日の土曜日も水は引かなかった。日曜日にやっと水が引いて、その次の日にふ化場に入ることができたんだ。車で行ったけれど通れないところもあって、迂回しながら行ったから時間がかかった。それに、着いて車を降りてからも、がれきや流されてきた家があったから、100メートル進むのに30分ぐらいかかったよ。やっとのことで現場にたどり着いたら、一番奥にある発電機が動いていた。全滅じゃなかった。その時に初めて“救われた。どうにかなるかも”と思った」。

復興のことを考えながら改めて現場を見ると、いたるところにがれきが散乱していて、池は泥で埋まっていた。まずは、そのがれきと泥を撤去することから始めなければならない。

■がれきと泥をどうするか？

萬さんはできるかぎり早く撤去作業を開始したかったが、行方不明者の搜索が最優先だった。日曜日にはすでに自衛隊が入り、搜索を行いながら、がれきを持っていくこともしてくれたという。3月いっぱいには搜索作業が中心となり、萬さんは現場に顔を出して自衛隊とやり取りをすることもあったが、できたのは、がれきを使えるものと使えないものとに分けるといったくらいで、撤去作業のめどは立たなかった。撤去に取りかかってもらえそうな業者をようやく見つけることができたのは、4月下旬になってからだった。

「当然のことだけど、それまでは搜索作業が最優先だから、どこに行っても撤去作業のために重機を手配してもらうことはできなかった。やっと話ができた業者に現場を見てもらい、撤去作業にどれくらいかかるか見通しを示してもらった。そうしたら、7月いっぱいまでかかると言われたよ」。

さけが戻ってくるのは9月上旬。がれきや泥の撤去だけで7月が終わってしまうと、設備の復旧が間に合うかどうかは危ういところだ。

■さけが帰ってくるまでに間に合うのか？

「確かに、通常の作業のやり方だと難しいかもしれない。だから、どうやって作業をすればいいかという計画を立てた。9月にさけが帰って来たとき、必要になるのは蓄養池だから、その撤去作業を最初にやってもらうことにした」

ふ化場全体でまんべんなく作業をしてしまうと、すべてのがれき撤去が完了しなければ施設の修復工事に取掛かることができない。そのため、萬さんは池ごとに集中して作業をしてもらい、撤去が終わった池から修復工事に取りかかってもらう計画を立てた。

「全部いっしょに作業をするのが理想だけど、現実的に難しかった。さけは必ず帰ってくるんだから、迎えてあげないと」と萬さんは力を込めて言った。

4月の終わりからは、毎日のようにトラックが10数台入り、がれきの撤去作業を行った。重機で作業をすると施設を傷つけてしまうような箇所は、地道に手作業をしてもらった。ふ化室は、破損して使えなくなったので壁をはがして鉄骨だけにしたという。萬さんたちも細かい泥をとったり、水を流したりして、すべての撤去作業が終わったのが7月末。今回の取材を行ったのが8月初旬だから、まさに作業が終わった直後だったことになる。

取材時、池のポンプから水が出ていた。これは、津波によって井戸水に海水が入ってしまったため、それを引き出すための作業ということだった。それができる環境になったのも、7月に入ってからだという。

「この事務所はまだ電気が回復していないから、発電機を持ってきて動かさないといけない。業者に頼んで2台の発電機を用意してもらって、それでポンプを動かしているんだよ。水がないことには、何もできないからね」。



▲井戸水をかけ流している池の様子

■見えないプレッシャー

「作業の見通しは立ってきて、8月いっぱい蓄養池の工事は完了の予定。スケジュールどおりに進めば、帰ってくるさけを受け入れることができる。今は、池の古い塗装をはがして新たに塗装する作業を行っている。前倒しで作業をしてもらっていて、何としてでも間に合わせるつもりだ」

希望が見えてきてはいるが、萬さんは不安も感じている。

「周りの漁師が、“津軽石ふ化場さえ直れば、あとは大丈夫だ”と言っている。ここは宮古市でも一番大きなふ化場だから。めどが立ってきてはいるけど、本当にできるかどうかという見えないプレッシャーがかかっているよ。業者が予定通りに作業を進められるかという心配もあるしね」

萬さんが手配しなければならないことはほかにもある。9月にはふ化室の工事が終わる予定だが、その後に必要となる浮上槽を用意しなくてはならない。

「浮上槽は 80 個ほど必要なんだ。ふ化室の工事が間に合わなくても、浮上槽は使い方次第ではふ化室としても使える。だから、これさえあれば稚魚を放流できる。最悪でも、浮上して魚の形になってくれればいいと考えている。そうすればその後、エサを与えなくても放流できるようになるからね」

苦労したが、浮上槽の手配もめどが立ったという。ただし、こちらも工事と同じく、予定通りに納品されるかどうかは期日になってみないとわからない。

「漁業組合の組合長が“復旧させる”と言ったんだから、それを実現させるよ。1 シーズン終わるまでは何とも言えないけど、設備としては、6 割以上の復旧を目指している。それらをうまく使っていけば、なんとか例年と同じくらいの作業ができる見込みだよ」。



▲がれきの中からは、まだ使えそうなふ化槽や浮上槽もいくつか見つかった

■自然との闘い

ふ化場で働くスタッフたちは、今後どうしていくのだろうか。それについてうかがうと、「全員ここで生きて働いていくよ」と教えてくれた。

萬さんたちは、普段から自然の脅威を知っている。これまでも、川の増水で網を倒されたといったことは何回もあるそうだ。自然との闘いには慣れているつもりだが、今回の地震や津波による被害は、予想をはるかに超えるものだった。

湾内の養殖は、特に被害が大きく、車も船も行けない場所は手つかずになっているところもある。地盤沈下も起きて、それが原因で復旧できないところも存在する。

だからこそ、復旧ができそうなら全力を尽くさなくてはいけない、という思いもあるのだろう。萬さんは一刻も早い復旧のために計画を立てて、厳しいスケジュールでもやり遂げる方法を考え、実行している。

復興までの計画を話してくれる萬さんの表情には力があふれていて、時折見せてくれる笑顔が印象的だった。

■萬さんからのメッセージ

「心配しないで。なんとかなっから。実際、なんとかするしかないしね。それに、さけが戻ってくる環境には影響がないと思うよ」

笑いながら言う萬さんのもとには、以前、見学に来た盛岡の小学生からの応援メッセージがあった。それを見ると、地元の人も、復興を切に願っていることが感じられた。



■湾の半分まで海底が見えた

3月11日の昼過ぎ、かきやほたての出荷作業が一段落した畠山さんは、港の作業場の2階にある部屋で調べものをしていました。すると、大きな横揺れに襲われ、しばらくして大津波警報が聞こえてきました。1960（昭和35）年のチリ地震津波を経験していた畠山さんは、今回もそれと同じくらい大きな津波が来るだろうと考え、作業場が床下浸水となった当時のことを思い出しながら、とりあえず機械類などを少し高い所へ上げた。また、地震のため出荷が間に合わなかった2000個のかきを詰めたパレットを、港を見下ろす高台にある自宅まで運んでおいた。

自宅から海の様子を見ていると、地震からおよそ30分後、潮が引き始め、その後、まるで風呂に湯がどンドンたまるように津波が押し寄せてきた。その次の引き波では、湾の半分まで海底が見え、さらに高い津波が港を襲った。先ほどまでいた作業場も、その波にすべてのみ込まれた。危険を感じた畠山さんは、孫を抱えて自宅裏の山に駆け上がった。

ほかの住民と山の上で合流し、そこで夕方過ぎまで待機したあと自宅に戻ると、幸いにも家は浸水していなかった。だが、港から家のある高台へと通じる坂道のほとんどの浸水した跡があり、道路脇の木々には漁に使っていたロープや浮き玉が絡まっていた。こんな高台にまで津波が押し寄せたのかと思うと、ぞっとした。

■木々を拾い、かきを食べ

翌朝、港の様子を見渡すと、何もない荒涼とした風景が広がっていた。過去の経験からも、三陸の海沿いで暮らす以上、津波の被害を受ける覚悟はあったが、これほど大きな被害が生じようとは想像していなかった。外部へとつながる道路も浸水し、潮の行き来が強い間は通ることができなかった。夕方になってようやく潮の流れが緩くなり、通れるようになったが、電気や水道は止まったままだった。

地震後は寒い日が続く、暖をとらねばならなかったのも、山から木々を拾い集めて燃料にした。また、水の確保も必要だったので、近くの沢まで水を汲みに行った。地震が起きてから10日ほどは、これらの作業だけで一日が終わる日々だった。食べ物は、地震直後に引き上げた2000個のかきがあった。「あんな状況で、家族の誰も体調を崩さなかったのは、やはりかきの栄養のおかげではないでしょうか」と畠山さんは振り返る。

■今年も開かれた植樹祭

畠山さんは、水産資源を守るためには森や川の自然を守ることが必要だと気づき、「森は海の恋人」を合言葉に、地元の漁師や流域の住民たちと、気仙沼の海に注ぎ込む大川上流での植林活動を20年以上前から続けている。震災の混乱が続くなかで、畠山さんは当初、毎年6月に行っている

植樹祭の開催については「それどころではない」と考えていたという。しかし、上流の室根地区から「こういうときだからこそ、地域を元気づけるためにも開催したい」「被災して亡くなった方の鎮魂と、これからの復興の祈念として開催することはできないか」と声を掛けられ、今年も行うことになった。

6月に開催された植樹祭には、これまでに最も多い1200人ほどの参加者が集ったという。今年の植樹祭では、復興祈願の碑が建てられ、その横にはアズサの木が植えられた。漁船の櫓ろの材料として使われてきた「しなやかで折れない」アズサの木は、復興への思いを表現したものであるという。

震災による避難などで離ればなれになっていた地域の人々どうしが、植樹祭へ集まったことでようやく顔を合わせることができたという。「今年は植樹祭の当日に行っただけで、ほとんどお客さんとして参加することしかできなかったけれど、おかげで力をもらいました」と畠山さんはその時の気持ちを語ってくれた。



▲植樹祭で建てられた復興祈願の碑

■来年の収穫をめざして

かきやほたては、昨年の秋から養殖を始めたものの多くが、春に収穫の時期を迎えていた。それが、70台ほどあった養殖いかだもろとも、すべて津波に流されてしまった。

しかし、畠山さんたちはすでに来年の収穫を見据えて動き出している。

養殖を始めるうえで最も重要なかきの種は、宮城県石巻市いしのまきの万石浦まんごくうらに、昨年の夏に採れて保管しておいた種が残っており、それを仕入れて使うことができた。今年の夏も万石浦ではかきの種が採れるようなので、10月頃にはそれらを仕入れてすぐに養殖にうつそうとしている。小粒にはなるが、早いものは来年の春から収穫できる見込みだそうだ。「小さくてもいいから売ってくれ、とお客さんからは言われています。かきが本当に足りないんですよ」。

また、11月頃にはほたての種も北海道から入手できる見込みで、来年6月ぐらいからの出荷を目ざしている。

施設の復旧も手早い。養殖いかだは、山に生えている杉の木を使って新たに30台ほど復旧した。いかだの組み立ては人手のいる作業だが、畠山さんには30代の息子さんが3人おり心強い。全国から駆けつけてくるボランティアにも手伝ってもらい、いかだや栈橋の復旧を進め



▲ボランティアの助けを借り、港の栈橋の復旧を進める

ている。「今年中には、いかだの数は元通りになると思う」と畠山さんは見込んでいる。



▲養殖いかだの復旧も急ピッチで進んでいる

また、海での作業を行ううえで、船は欠かすことができない。ありがたいことに、全国から支援の手が差し伸べられ、船の数も揃ってきているという。

これまでかかわってきた人々から、さまざまな支援が寄せられるなかで、畠山さんは改めて人とのつながりが重要であることを認識したという。

■三陸の海の豊かさ

「この地で、果たして漁業を続けていくことができるのか…」畠山さんも、最初は不安だったという。「地震が起きてから2か月ぐらひは、海を見ても魚がいなかったのて、とうとうだめなのかなと思いました。でも、だんだん小魚が見えるようになって、それからあつという間に魚があふれるように出てきました。これは本当に嬉しかったですね」。

大学の研究者など、各方面から協力を得て、海水や海底の泥の分析調査を行ったところ、生き物が育つ条件は十分整っていることが判明した。この調査結果は、この地で漁業を続けていく後押しにもなった。

港のそばにあった40軒以上もの家が津波に流された。地震の直後、住民は「こんな危険な地にはもう住めない」と話していたという。だが、2か月ほどたつと「やはりこの地で暮らしたい、高台に家を建てて戻りたい」という人が多くなつた。

「海で働くことはたしかに危険を伴う。それでも、海の豊かさを知っているから、みんな戻ってきたいと思うんですよ」と畠山さんは言う。今、魚市場や水産加工工場、保冷施設なども復旧の途上であるため、魚の漁獲量は制限されている。定置網なども設置されていないところが多い。すると、自然と魚が増えて、マンボウのような大型の魚も湾の近くに寄ってくるのだという。「農地は放っておくと荒れていくが、海は逆に豊かになっていく。いかに普段、我々が魚を多く獲つて暮らしているかということの裏返しでもあるんですね」と、三陸の海の豊かさを畠山さんは語つてくれた。「誰も海を恨んでいない。これが我々漁師の本当の気持ちですよ」。

■これからも「森は海の恋人」

森や川の自然を守ることが、海を豊かにすることにつながるという考えは、今ももちろん変わらない。畠山さんは、震災によって受けた被害を逆手にとって、森から海までの地域全体を改めて見直し、自然環境を大事にした地域づくりのモデルを示していく構想を描いている。このような取り組みが、地域の人々の生活を潤すことにもつながるとも考えている。

日本列島には中央に山脈が通り、そこから海に向かっていくつもの河川が注ぎ込んでいる。森を大事にし、海を育てるモデルは、全国各地に当てはまるものだと畠山さんは考えている。海産物が

豊富になれば、食糧問題の解決にもつながっていく。いずれ、三陸の海全体、日本全国、さらに世界へと、このような環境に配慮した地域づくりの動きが広がっていくことを、畠山さんは望んでいる。

■畠山さんからのメッセージ

「大きな津波の被害を受けましたが、海は壊れていませんでした。海の生き物はちゃんと戻ってきてくれています。かきの養殖を続けることができる条件が整っていることも調査をしてわかりました。その事実から勇気もらって、今、復興に向けて仕事を始めています。2年ぐらいすれば、元のように戻ると信じています。被災した子どもたちもたくさんいると思いますが、どうか前を向いて、未来を信じて生きてください。」